

河童

どうか Kappa と発音してください。

芥川龍之介



序

これはある精神病院の患者、——第二十三号がだれにでもしゃべる話である。彼はもう三十を越しているであろう。が、一見したところはいかにも若々しい狂人である。彼の半生の経験は、——いや、そんなことはどうでもよい。彼はただじつと両膝りょうひざをかかえ、時々窓の外へ目をやりながら、（鉄格子てつこうしをはめた窓の外には枯れ葉さえ見えない檜かしのの木が一本、雪曇りの空に枝を張っていた。）院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしゃべりつづけた。もつとも身ぶりはしなかつたわけではない。彼はたとえ「驚いた」と言う時には急に顔をのけぞらせた。……

僕はこういう彼の話をかなり正確に写したつもりである。もしまただれか僕の筆記に飽き足りない人があるとなれば、東京市

外××村のS精神病院を尋ねてみるがよい。年よりも若い第二十三号はまず^{ていねい}丁寧^{ていねい}に頭を下げ、蒲団^{ふとん}のない椅子^{いす}を指さすであろう。それから憂鬱^{ゆううつ}な微笑を浮かべ、静かにこの話を繰り返すであろう。最後に、——僕はこの話を終わった時の彼の顔色を覚えてる。彼は最後に身を起こすが早いか、たちまち拳骨^{げんこつ}をふりまわしながら、だれにでもこう怒鳴^{どな}りつけるであろう。——
「出て行け！ この悪党めが！ 貴様も莫迦^{ぼか}な、嫉妬^{しつと}深い、猥褻^{わいせつ}な、ずうずうしい、うぬぼれきつた、残酷な、虫のいい動物なんでしょう。出ていけ！ この悪党めが！」

一

三年前^{まえ}の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背

しかし僕の目をさえぎるものはやはり深い霧ばかりです。もつとも時々霧の中から太い毛生櫂ぶなや椈もみの枝が青あおと葉を垂たらしたのも見えなかつたわけではありません。それからまた放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれどもそれらは見えなかつたと思うと、たちまち濛々もうもうとした霧の中に隠れてしまうのです。そのうちに足もくたびれてくれば、腹もだんだん減りはじめ、——おまけに霧にぬれ透とおった登山服や毛布なども並みたいていの重さではありません。僕はとうとう我がを折りましたから、岩にせかされている水の音をたよりに梓川の谷へ下おりることにしました。

僕は水ぎわの岩に腰かけ、とりあえず食事にとりかかりました。コオンド・ビイフの罐かんを切ったり、枯れ枝を集めて火をつけたり、——そんなことをしているうちにかれこれ十分はたつ

たでしよう。その間あいだにどこまでも意地の悪い霧はいつかほのぼのと晴れかかりました。僕はパンをかじりながら、ちよつと腕どけい時計をのぞいてみました。時刻はもう一時二十分過ぎです。が、それよりも驚いたのは何か気味の悪い顔が一つ、円まるい腕時計の硝子ガラスの上へちらりと影を落としましたことです。僕は驚いてふり返りました。すると、——僕が河童かっぱというものを見たのは実にこの時がはじめてだったのです。僕の後ろにある岩の上には画えにあるとおりの河童が一匹、片手は白樺しらばの幹を抱え、片手は目の上にかざしたなり、珍しそうに僕を見おろしていました。

僕は呆あつ気けにとられたまま、しばらくは身動きもせずにいました。河童もやはり驚いたとみえ、目の上の手さえ動かさずいままん。そのうちに僕は飛び立つが早いのか、岩の上の河童へおどりかかりました。同時にまた河童も逃げ出しました。いや、おそ

らくは逃げ出したのでしよう。実はひらりと身をかわしたと思
うと、たちまちどこかへ消えてしまったのです。僕はいよいよ
驚きながら、熊笹くまざさの中を見まわしました。すると河童は逃げ腰
をしたなり、二三メートル隔たった向こうに僕を振り返って見
ているのです。それは不思議でもなんでもありません。しかし
僕に意外だったのは河童の体の色からだのことです。岩の上に僕を見
ていた河童は一面に灰色を帯びていました。けれども今は体中
すっかり緑いろに変わっているのです。僕は「畜生！」とおお
声をあげ、もう一度河童かっぱへ飛びかかりました。河童が逃げ出し
たのはもちろんです。それから僕は三十分ばかり、熊笹くまざさを突き
ぬけ、岩を飛び越え、遮しやにむに二無二河童を追いつづけました。

河童もまた足の早いことは決して猿さるなどに劣りません。僕は
夢中になって追いかける間あいだに何度もその姿を見失おうとしまし

た。のみならず足をすべらして転がったこともたびたびです。が、大きい椽とちの木が一本、太ぶとと枝を張った下へ来ると、幸いにも放牧の牛が一匹、河童の往ゆく先へ立ちふさがりました。しかもそれは角つの太い、目を血走らせた牝牛おうしなのです。河童はこの牝牛を見ると、何か悲鳴をあげながら、ひときわ高い熊笹の中へもんどりを打つように飛び込みました。僕は、——僕も「しめた」と思いましたから、いきなりそのあとへ追いつがりました。するとそこには僕の知らない穴でもあいていたのでしよう。僕は滑なめらかな河童の背中にやっと指先がさわったと思うと、たちまち深い闇やみの中へまっさかさまに転げ落ちました。が、我々人間の心はこういう危機一髪の際にも途方とほうもないことを考えるものです。僕は「あつ」と思う拍子にあの上高地かみこうちの温泉宿のそばに「河童橋かっぱばし」という橋があるのを思い出しました。それから、——

それから先のことは覚えていません。僕はただ目の前に稲妻いなずまに似たものを感じたぎり、いつの間にか正気しょうきを失っていました。

二

そのうちにやっと気がついてみると、僕は仰向けあおむに倒れたまま、大勢の河童にとり囲まれていました。のみならず太い嘴くちばしの上に鼻目はなめがね金をかけた河童が一匹、僕のそばへひざまずきながら、僕の胸へ聴診器を当てていました。その河童は僕が目をあいたのを見ると、僕に「静かに」という手真似てまねをし、それからだれか後ろにいる河童へ Quax, quax と声をかけました。するとどこからか河童が二匹、担架たんかを持って歩いてきました。僕はこの担架たんかにのせられたまま、大勢の河童の群がった中を静かに何町

か進んでゆきました。僕の両側に並んでいる町は少しも銀座通りと違いありません。やはり毛生櫂ふぶなの並み木のかげにいろいろの店が日除ひよけを並べ、そのまた並み木にはさまれた道を自動車が何台も走っているのです。

やがて僕を載せた担架は細い横町よこぢょうを曲つたと思うと、ある家うちの中へかつぎこまれました。それは後のちに知つたところによれば、あの鼻目金をかけた河童の家、——チャックという医者の家だつたのです。チャックは僕を小ぎれいなベッドの上へ寝かせました。それから何か透明みずくすりな水菓みずくすりを一杯飲ませました。僕はベッドの上に横たわつたなり、チャックのするままになつていました。実際また僕の体からだはろくに身動きもできないほど、節々ふしぶしが痛んでいたのですから。

チャックは一日に二三度は必ず僕を診察にきました。また三

日に一度ぐらいは僕の最初に見かけた河童、——バッグという漁夫りょうしも尋ねてきました。河童は我々人間が河童のことを知っているよりもはるかに人間のことを知っています。それは我々人間が河童を捕獲することよりもずっと河童が人間を捕獲するところが多いためでしょう。捕獲というのは当たらないまでも、我々人間は僕の前にもたびたび河童の国へ来ているのです。のみならず一生河童の国に住んでいたものも多かったです。なぜと言つてごらんなさい。僕らはただ河童かっぱではない、人間であるという特権のために働かずに食つていられるのです。現にバッグの話によれば、ある若い道路工夫こうふなどはやはり偶然この国へ来た後、雌めすの河童を妻にめとり、死ぬまで住んでいたということ。もつともそのまた雌の河童はこの国第一の美人だった上、夫の道路工夫をごまかすのにも妙をきわめていたということ。

す。

僕は一週間ばかりたつた後、この国の法律の定めるところにより、「特別保護住民」としてチャックの隣に住むことになりました。僕の家は小さい割にいかにも瀟洒しょうしゃとできあがっていました。もちろんこの国の文明は我々人間の国の文明——少なくとも日本の文明などとあまり大差はありません。往來に面した客間の隅すみには小さいピアノが一台あり、それからまた壁には額縁がくぶちへ入れたエツテイニングなども懸かつていました。ただ肝腎かんじんの家をはじめ、テエブルや椅子いすの寸法も河童の身長に合わせてありますから、子どもの部屋へやに入れられたようにそれだけは不便に思いました。

僕はいつも日暮れがたになると、この部屋にチャックやバツグを迎え、河童の言葉を習いました。いや、彼らばかりではあ

りません。特別保護住民だった僕にだれも皆好奇心を持っていましたから、毎日血圧を調べてもらいに、わざわざチャックを呼び寄せるゲエルという硝子会社ガラスの社長などもやはりこの部屋へ顔を出したものです。しかし最初の半月ほどの間に一番僕と親しくしたのはやはりあのバググという漁夫りょうしだったのです。

ある生暖かい日の暮れです。僕はこの部屋のテエブルの中になまあた漁夫のバググと向かい合っていました。するとバググはどう思っ
たか、急に黙ってしまった上、大きい目をいつそう大きくして
じつと僕を見つめました。僕はもちろん妙に思いましたから、
「Quax, Bag, quo quel, quan?」と言いました。これは日本語に
翻訳すれば、「おい、バググ、どうしたんだ」ということです。
が、バググは返事をしません。のみならずいきなり立ち上がる
と、べろりと舌を出したなり、ちょうど蛙かえるの跳ねるはように飛び

かかる気色けしきさえ示しました。僕はいよいよ無気味になり、そつと椅子いすから立ち上がると、一足いっそく飛びに戸口へ飛び出そうとしました。ちようどそこへ顔を出したのは幸いにも医者いしやのチャックです。

「こら、バッグ、何をしているのだ？」

チャックは鼻目金はなめがねをかけたまま、こういうバッグ一をにらみつけました。するとバッグは恐れいったとみえ、何度も頭へ手をやりながら、こう言つてチャックにあやまるのです。

「どうもまことに相あいすみません。実はこの旦那だんなの気味悪いたずらがるのがおもしろかつたものですから、つい調子に乗つて悪戯いたずらをしたのです。どうか旦那だんなも堪忍かんにんしてください。」

僕はこの先を話す前にちよつと河童というものを説明しておかなければなりません。河童はいまだに実在するかどうかも疑問になつてゐる動物です。が、それは僕自身が彼らの間に住んでいた以上、少しも疑う余地はないはずです。ではまたどういう動物かと言へば、頭に短い毛のあるのはもちろん、手足に水掻みずかきのついでゐることも「水虎考略」すいここうりやくなどに出ているのと著しい違いはありません。身長もざつと一メートルを越えるか越えぬくらいでしょう。体重は医者おおかづのチャックによれば、二十ポンドから三十ポンドまで、――まれには五十何ポンドぐらいの大河童おおかわごもいると言つていました。それから頭のまん中には楕円形だえんけいの皿さらがあり、そのまた皿は年齢により、だんだん固かたさを加えるようです。現に年をとつたバッグの皿は若いチャックの皿などとは全

然手ざわりも違うのです。しかし一番不思議なのは河童の皮膚の色のことでしよう。河童は我々人間のようにな一定の皮膚の色を持っていません。なんでもその周囲の色と同じ色に変わってしまう、——たとえば草の中にいる時には草のように緑色に変わり、岩の上にいる時には岩のように灰色に変わるのです。これはもちろん河童に限らず、カメレオンにもあることです。あるいは河童は皮膚組織の上に何かカメレオンに近いところを持っているのかもしれませんが。僕はこの事実を発見した時、さいこく西国の河童は緑色であり、とうほく東北の河童は赤いという民俗学上の記録を思い出しました。のみならずバッグを追いかける時、突然どこへ行ったのか、見えなくなつたことを思い出しました。しかも河童は皮膚の下によほど厚い脂肪を持っているとみえ、この地下の国の温度は比較的低いのもかかわらず、かつし(平均華氏五十度

前後です。) 着物めがねというものを知らず二にいるのです。もちろんどの河童も目金めがねをかけたなり、巻煙草まきたばこの箱を携えたり、金入れかねいを持ったりはしているでしょう。しかし河童はカンガルウのように腹に袋を持っていきますから、それらのものをしまう時にも格別不便はしないのです。ただ僕におかしかったのは腰のまわりさえおおわないことです。僕はある時この習慣をなぜかとバッグ三に尋ねてみました。すると「バッグはのけぞったまま、いつまでもげらげら笑っていました。おまけに「わたしはお前さんの隠しているのがおかしい」と返事をしました。」

四

僕はだんだん河童の使う日常の言葉を覚えてきました。従つ

て河童の風俗や習慣のみこめるようになってきました。その中でも一番不思議だったのは河童は我々人間の真面目まじめに思うことをおかしがる、同時に我々人間のおかしがることを真面目に思う——こういうとんちんかんな習慣です。たとえば我々人間は正義とか人道とかいうことを真面目に思う、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかえて笑い出すのです。つまり彼らの滑稽こっけいという観念は我々の滑稽という観念と全然標準を異ことにしているのです。僕はある時医者いしやのチャックと産児制限さんじしげんの話をしていました。するとチャックは大口をあいて、鼻目はなめがね金の落ちるほど笑い出しました。僕はもちろん腹が立ちましたから、何がおかしいかと詰問つつましました。なんでもチャックの返答はだいたいこうだったように覚えています。もつとも多少細かいところは間違まちがっているかもしれませぬ。なにしろまだそのころは

僕も河童の使う言葉をすつかり理解していなかったのですから。「しかし両親のつごうばかり考えているのはおかしいですからね。どうもあまり手前勝手ですからね。」

その代わりに我々人間から見れば、実際また河童かっぱのお産ぐらい、おかしいものではありません。現に僕はしばらくたつてから、バッグの細君のお産をするところをバッグの小屋へ見物にゆきました。河童もお産をする時には我々人間と同じことです。やはり医者や産婆さんばなどの助けを借りてお産をするのです。けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるように母親の生殖器に口をつけ、「お前はこの世界へ生まれてくるかどうか、よく考えた上で返事をしろ。」と大きな声で尋ねるのです。バッグもやはり膝ひざをつきながら、何度も繰り返してこう言いました。それからテエブルの上にあつた消毒用の水薬すいやくでうがいをしました。

た。すると細君の腹の中の子は多少気兼ねでもしているとも見え、
こう小声に返事をしました。

「僕は生まれたくはありません。第一僕のお父さんとうの遺伝は精神病だけでもたいへんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じていますから。」

バッグはこの返事を聞いた時、てれたように頭をかいていました。が、そこに合わせた産婆はたちまち細君の生殖器へ太い硝子ガラスの管かんを突きこみ、何か液体を注射しました。すると細君はほつとしたように太い息をもらしました。同時にまた今まで大きかった腹は水素瓦斯すいそガスを抜いた風船のようにへたへたと縮んでしまいました。

こういう返事をするくらいですから、河童の子どもは生まれるが早いか、もちろん歩いたりしゃべったりするのです。なん

でもチャックの話では出産後二十六日に神の有無うむについて講演をした子どももあつたとかいうことです。もつともその子どもは二月目には死んでしまつたといふことですが。
ふたつきめ

お産の話をしたついでですから、僕がこの国へ来た三月目みつぎめに偶然ある街の角まちかどで見かけた、大きいポスタアの話をしましよう。その大きいポスタアの下には喇叭らっぱを吹いている河童だの剣を持つてゐる河童だのが十二三匹描かいてありました。それからまた上には河童の使う、ちようど時計とけいのゼンマイに似た螺旋文らせん字が一面に並べてありました。この螺旋文字を翻訳すると、だいたいこういう意味になるのです。これもあるいは細かいところは間違まちがつてゐるかもしれませんが、とにかく僕としては僕といつしよに歩いてゐた、ラップという河童の学生が大声に読み上げてくれる言葉をいちいちノオトにとつておいたのです。

遺伝的義勇隊を募る!!!

健全なる男女の河童よ!!!

悪遺伝を撲滅ぼくめつするために

不健全なる男女の河童と結婚せよ!!!

僕はもちろんその時にもそんなことを行なわれないことをラップに話して聞かせました。するとラップばかりではない、ポスタアの近所にいた河童はことごとくげらげら笑い出しました。

「行なわれない？ だってあなたの話ではあなたがたもやはり

我々のように行なっていると思えますがね。あなたは令息が女中に惚ほれたり、令嬢が運転手に惚れたりするのはなんのためだと思っっているのです？ あれは皆無意識的に悪遺伝を撲滅して

いるのですよ。第一この間あなたの話したあなたがた人間の義勇隊よりも、——一本の鉄道を奪うために互いに殺し合う義勇

隊ですね、——ああいう義勇隊に比べれば、ずっと僕たちの義勇隊は高尚ではないかと思えますがね。」

ラップは真面目まじめにこう言いながら、しかも太い腹だけはおかしそうに絶えず浪立なみだたせていました。が、僕は笑うどころか、あわててある河童かっぱをつかまえようとしました。それは僕の油断を見すまし、その河童が僕の万年筆を盗んだことに気がついたからです。しかし皮膚なめの滑らかな河童は容易に我々にはつかまりません。その河童もぬらりとすべり抜けるが早いかいつさんからだに逃げ出してしまいました。ちようど蚊のようにやせた体を倒れるかと思うくらいのもめらせながら。

僕はこのラップという河童にバッグにも劣らぬ世話になりました。が、その中でも忘れられないのはトックという河童に紹介されたことです。トックは河童仲間の詩人です。詩人が髪を長くしていることは我々人間と変わりません。僕は時々トックの家へ退屈しのぎに遊びにゆきました。トックはいつも狭い部屋へやに高山植物の鉢植えはちうを並べ、詩を書いたり煙草たばこをのんだり、いかにも気楽そうに暮らしていました。そのまた部屋の隅すみには雌めすの河童が一匹、(トックは自由恋愛家ですから、細君というものは持たないのです。)編み物か何かしていました。トックは僕の顔を見ると、いつも微笑してこう言うのです。(もつとも河童の微笑するのはあまりいいものではありません。少なくとも僕は最初のうちはむしろ無気味に感じたものです。)

「やあ、よく来たね。まあ、その椅子いすにかけたまえ。」

トックはよく河童の生活だの河童の芸術だの話をしました。トックの信ずるところによれば、当たり前前の河童の生活ぐらい、莫迦ぼかげているものはありません。親子夫婦兄弟などというのはことごとく互いに苦しめ合うことを唯一の楽しみにして暮らしているのです。ことに家族制度というものは莫迦ぼかげている以上にも莫迦ぼかげているのです。トックはある時窓の外を指さし、「見たまえ。あの莫迦ぼかげさ加減を！」と吐き出すように言いました。窓の外の往来にはまだ年の若い河童が一匹、両親らしい河童をはじめ、七八匹の雌雄めすおすの河童を頸くびのまわりへぶら下げながら、息も絶え絶えに歩いていました。しかし僕は年の若い河童の犠牲的精神に感心しましたから、かえってその健気けなげさをほめ立てました。

「ふん、君はこの国でも市民になる資格を持っている。……時

に君は社会主義者かね？」

僕はもちろん *qua*（これは河童の使う言葉では「然り^{しか}」という意味を現わすのです。）と答えました。

「では百人の凡人のために甘んじてひとりの天才を犠牲にすることも顧みないはずだ。」

「では君は何主義者だ？ だれかトツク君の信条は無政府主義だと言っていたが、……」

「僕か？ 僕は超人（直訳すれば超河童です。）だ。」

トツクは昂然^{こうぜん}と言い放ちました。こういうトツクは芸術の上にも独特な考えを持っています。トツクの信ずるところによれば、芸術は何ものの支配をも受けない、芸術のための芸術である、従つて芸術家たるものは何よりも先に善悪を絶^{ぜつ}した超人でなければならぬということです。もつともこれは必ずしもトツク

一匹の意見ではありません。トツクの仲間の詩人たちはたいいて同意見を持つているようです。現に僕はトツクといつしよにたびたび超人倶楽部クラブへ遊びにゆきました。超人倶楽部に集まってくるのは詩人、小説家、戯曲家、批評家、画家、音楽家、彫刻家、芸術上の素人しろうと等です。しかしいづれも超人です。彼らは電燈の明るいサロンにいつも快活に話し合っていました。のみならず時には得々とくとくと彼らの超人ぶりを示し合っていました。たとえばある彫刻家などは大きい鬼羊歯おにしだの鉢植はちうえの間に年の若い河童かっぱをつかまえながら、しきりに男色だんしよくをもてあそんでいました。またある雌めすの小説家などはテエブルの上に立ち上がったなり、アブサントを六十本飲んで見せました。もつともこれは六十本目にテエブルの下へ転ころげ落ちるが早いのか、たちまち往生してしまいました。

僕はある月のいい晩、詩人のトックと肘ひじを組んだまま、超人倶楽部から帰ってきました。トックはいつになく沈みこんでひとことも口をきかずにいました。そのうちに僕らは火ほかげのさした、小さい窓の前を通りかかりました。そのまた窓の向こうには夫婦らしい雌雄めすおすの河童が二匹、三匹の子どもの河童といつしよに晚餐ばんさんのテエブルに向かつているのです。するとトックはため息をしながら、突然こう僕に話しかけました。

「僕は超人的恋愛家だと思っっているがね、ああいう家庭の容子ようすを見ると、やはりうらやましきを感じるんだよ。」

「しかしそれはどう考えても、矛盾しているとは思わないかね？」
けれどもトックは月明りの下にじっと腕を組んだまま、あの小さい窓の向こうを、——平和な五匹の河童たちの晚餐のテエブルを見守っていました。それからしばらくしてこう答えまし

た。

「あすこにある玉子焼きはなんとと言っても、恋愛などよりも衛生的だからね。」

六

実際また河童の恋愛は我々人間の恋愛とはよほど趣を異ことにしています。雌の河童はこれぞという雄の河童を見つけるが早い
か、雄の河童をとらえるのにいかなる手段も顧みません、一番
正直な雌の河童は遮しやにむに二無二雄の河童を追いかけます。現に
僕は気違いのように雄の河童を追いかけている雌の河童を見か
けました。いや、そればかりではありません。若い雌の河童は
もちろん、その河童の両親や兄弟までいつしよになつて追いか

けるのです。雄の河童こそみじめです。なにしろさんざん逃げまわったあげく、運よくつかまらずにすんだとしても、二三か月は床とこについてしまふのですから。僕はある時僕の家にとツクの詩集を読んできました。するとそこへ駆けこんできたのはあのラップという学生です。ラップは僕の家へ転げこむと、床ゆかの上へ倒れたなり、息も切れ切れにこう言うのです。

「大変たいへんだ！　とうとう僕は抱きつかれてしまった！」

僕はとつきに詩集を投げ出し、戸口の錠じょうをおろしてしまいました。しかし鍵穴かぎあなからのぞいてみると、硫黄いおうの粉末を顔に塗つた、背せいの低い雌めすの河童かっぱが一匹、まだ戸口にうろついているのです。ラップはその日から何週間か僕の床とこの上に寝ていました。のみならずいつかラップの嘴くちばしはすっかり腐つて落ちてしまいました。

もつともまた時には雌の河童を一生懸命に追いかける雄おすの河童もないではありません。しかしそれもほんとうのところは追いかけてはいられないように雌の河童が仕向けるのです。僕はやはり気違いのように雌の河童を追いかけている雄の河童も見かけました。雌の河童は逃げてゆくうちにも、時々わざと立ち止まってみたり、四よつん這ぼいになったりして見せるのです。おまけにちようどいい時分になると、さもがっかりしたように楽々とかませてしまうのです。僕の見かけた雄の河童は雌の河童を抱いたなり、しばらくそこに転ころがっていました。が、やつと起き上がったのを見ると、失望というか、後悔というか、とにかくなんとも形容できない、気の毒な顔をしていました。しかしそれはまだいいのです。これも僕の見かけた中に小さい雄の河童が一匹、雌の河童を追いかけていました。雌の河童は例の

とおり、誘惑的遁走とんそうをしているのです。するとそこへ向こうの街まちから大きい雄の河童が一匹、鼻息を鳴らせて歩いてきました。雌の河童はなにかの拍子にふとこの雄の河童を見ると「大変たいへんです！ 助けてください！ あの河童はわたしを殺そうとするのです！」と金切りかなき声を出して叫びました。もちろん大きい雄の河童はたちまち小さい河童をつかまえ、往来のまん中へねじ伏せました。小さい河童は水掻みずかきのある手に二三度空くうをつかんだなり、とうとう死んでしまいました。けれどももうその時には雌の河童はにやにやしながら、大きい河童の頸くびつ玉へしつかりしがみついてしまつていたのです。

僕の知つていた雄おすの河童かっぱはだれも皆言い合わせたように雌めすの河童に追いかけられました。もちろん妻子を持つているバッグでもやはり追いかけられたのです。のみならず二三度はつかまつ

たのです。ただマッグという哲学者だけは（これはあのトックという詩人の隣にいる河童です。）一度もつかまつたことはありません。これは一つにはマッグぐらい、醜い河童も少ないためでしょう。しかしまた一つにはマッグだけはあまり往来へ顔を出さずに家うちにばかりいるためです。僕はこのマッグの家へも時々話しに出かけました。マッグはいつも薄暗い部屋へやに七色なないろの硝子いろガラスのランタアンをともし、脚あしの高い机に向かいながら、厚い本ばかり読んでいます。僕はある時こういうマッグと河童の恋愛を論じ合いました。

「なぜ政府は雌の河童が雄の河童を追いかけのをもつと嚴重に取り締まらないのです？」

「それは一つには官吏の中に雌の河童の少ないためですよ。雌の河童は雄の河童よりもいつそう嫉妬心しつとしんは強いものですからね、

雌の河童の官吏さえ殖えれば、きつと今よりも雄の河童は追いかけられずに暮らせるでしょう。しかしその効力もしれたものですね。なぜと言つてごらんなさい。官吏同志でも雌の河童は雄の河童を追いかけますからね。」

「じゃあなたのように暮らしているのは一番幸福なわけですね。」
するとマツグは椅子を離れ、僕の両手を握つたまま、ため息といつしよにこう言いました。

「あなたは我々河童ではありませんから、おわかりにならないのももつともです。しかしわたしもどうかすると、あの恐ろしい雌の河童に追いかけられたい気も起こるのですよ。」

僕はまた詩人のトックとたびたび音楽会へも出かけました。が、いまだに忘れられないのは三度目に聴ききにいった音楽会のことです。もつとも会場の容ようす子などはあまり日本と変わっていません。やはりだんだんせり上がった席に雌雄の河童が三四百匹、いずれもプログラムを手にながら、一心に耳を澄ませているのです。僕はこの三度目の音楽会の時にはトックやトックの雌の河童のほかにも哲学者のマツグといっしょになり、一番前の席にすわっていました。するとセロの独奏が終わった後、妙に目の細い河童が一匹、無造作むぞうさに譜本を抱かかえたまま、壇の上へ上がってきました。この河童はプログラムの教えるとおり、名高いクラバツクという作曲家です。プログラムの教えるとおり、——いや、プログラムを見るまでもありません。クラバツクはトックが属している超人倶楽部クラバの会員ですから、僕もまた

顔だけは知っているのです。

「Lied——Craback」(この国のプログラムもたいていは独逸語^{ドイツ}を並べていました。)

クラバツクは盛んな拍手のうちちよつと我々へ一礼した後、静かにピアノの前へ歩み寄りました。それからやはり無造作に自作のリイドを弾^ひきはじめました。クラバツクはトツクの言葉によれば、この国の生んだ音楽家中、前後に比類のない天才だそうです。僕はクラバツクの音楽はもちろん、そのまた余技の抒情詩^{じょじょう}にも興味を持っていましたから、大きい弓なりのピアノの音に熱心に耳を傾けていました。トツクやマツグも恍惚^{こうこう}としていたことはあるいは僕よりもまさっていたでしょう。が、あの美しい(少なくとも河童^{かっば}たちの話によれば)雌^{めす}の河童だけはしつかりプログラムを握ったなり、時々さもいらだたしように

長い舌をべろべろ出していました。これはマツグの話によれば、なんでもかれこれ十年前ぜん前にクラバックをつかまえそこなつたものですから、いまだにこの音楽家を目の敵かたきにしているのだとかいうことです。

クラバックは全身に情熱をこめ、戦うようにピアノを弾ひきつづけました。すると突然会場の中に神鳴りのように響き渡つたのは「演奏禁止」という声です。僕はこの声にびっくりし、思わず後ろをふり返りました。声の主は紛れもない、一番後ろの席みにいる身の丈たけ抜群の巡査です、巡査は僕がふり向いた時、悠然ゆうぜんと腰をおろしたまま、もう一度前よりもおお声に「演奏禁止」と怒鳴どなりました。それから、――

それから先は大混乱です。「警官横暴!」「クラバック、弾け!」「莫迦ぼか!」「畜生!」「ひっこめ!」「負けるな!」――こ

ういう声のわき上がった中に椅子は倒れる、プログラムは飛ぶ、おまけにだれが投げけるのか、サイダアの空罎あきびんや石ころやかじりかけの胡瓜きゅうりさえ降ってくるのです。僕は呆あつ気けにとられましたから、トツクにその理由を尋ねようと思いました。が、トツクも興奮したとみえ、椅子の上に突つ立ちながら、「クラバツク、弾け！ 弾け！」とわめきつづけています。のみならずトツクの雌の河童もいつの間まに敵意を忘れたのか、「警官横暴」と叫んでいることは少しもトツクに変わりません。僕はやむを得ずマツグに向かい、「どうしたのです？」と尋ねてみました。

「これですか？ これはこの国ではよくあることですよ。元来画えだの文芸だのは……」

マツグは何か飛んでくるたびにちよつと頸くびを縮めながら、相変わらず静かに説明しました。

「元来画だの文芸だのはだれの目にも何を表わしているかはとにかくくちやんとわかるはずですから、この国では決して発売禁止や展覧禁止は行なわれません。その代わりにあるのが演奏禁止です。なにしろ音楽というものだけはどんなに風俗を壊乱する曲でも、耳のない河童にはわかりませんからね。」

「しかしあの巡査は耳があるのですか？」

「さあ、それは疑問ですね。たぶん今の旋律を聞いているうちに細君といつしよに寝ている時の心臓の鼓動でも思い出したのでしょうか。」

こういう間にも大騒ぎはいよいよ盛んになるばかりです。クラバツクはピアノに向かったまま、傲然ごうぜんと我々をふり返っていました。が、いくら傲然としても、いろいろのもの飛んでくるのはよけないわけにゆきません。従ってつまり二三秒置

きにせつかくの態度も変わったわけです。しかしとにかくだいたいとしては大音楽家の威厳を保ちながら、細い目をすさまじくかがやかせていました。僕は——僕ももちろん危険を避けるためにトックを小楯こだてにとつていたものです。が、やはり好奇心に駆られ、熱心にマッグと話しつつづけました。

「そんな検閲は乱暴じゃありませんか？」

「なに、どの国の検閲よりもかえって進歩しているくらいですよ。たとえば××をごらん下さい。現ひとつきについて一月ばかり前にも、……」

ちようどこう言いかけたとたんです。マッグはあいにく脳天に空鑢が落ちたものですから、quack（これはただ間投詞かんとうしです）と一声叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

河童 どうか Kappa と発音してください。

僕は硝子^{ガラス}会社の社長のゲエルに不思議にも好意を持っていました。ゲエルは資本家中の資本家です。おそらくはこの国の河童^{かっぱ}の中でも、ゲエルほど大きい腹をした河童は一匹もいなかったのに違いありません。しかし荔枝^{れいし}に似た細君や胡瓜^{きゅうり}に似た子どもを左右にしながら、安楽椅子^{いす}にすわっているところはほとんど幸福そのものです。僕は時々裁判官のペップや医者^{いしや}のチャックにつれられてゲエル家の晩餐^{ばんさん}へ出かけました。またゲエルの紹介状を持ってゲエルやゲエルの友人たちが多少の関係を持っているいろいろの工場も見て歩きました。そのいろいろの工場の中でもことに僕におもしろかったのは書籍製造会社の工場です。僕は年の若い河童の技師とこの工場の中へはいり、水力電

気を動力にした、大きい機械をながめた時、今さらのように河童の国の機械工業の進歩に驚嘆しました。なんでもそこでは一年間に七百万部の本を製造するそうです。が、僕を驚かしたのは本の部数ではありません。それだけの本を製造するのに少しも手数のかからないことです。なにしろこの国では本を造るのにただ機械の漏斗形じょうごがたの口へ紙とインクと灰色をした粉末とを入れるだけなのですから。それらの原料は機械の中へはいると、ほとんど五分とたたないうちに菊版きくばん、四六版しろくばん、菊半裁版きくはんさいばんなどの無数の本になって出てくるのです。僕は瀑たきのように流れ落ちるいろいろな本をながめながら、反そり身になった河童の技師にその灰色の粉末はなんと言うものかと尋ねてみました。すると技師は黒光りに光った機械の前にたたずんだまま、つまらなそうにこう返事をしました。

「これですか？ これは驢馬ろばの脳髓のうずいですよ。ええ、一度乾燥させてから、ぎつと粉末にしただけのものです。時価は一噸とん二三錢ですがね。」

もちろんこういう工業上の奇蹟は書籍製造会社にばかり起っているわけではありません。絵画製造会社にも、音楽製造会社にも、同じように起こつていゝのです。実際またゲエルの話によれば、この国では平均一か月に七八百種の機械が新案され、なんでもずんずん人手を待たずに大量生産が行なわれるそうです。従つてまた職工の解雇かいこされるのも四五万匹を下らないそうです。そのくせまだこの国では毎朝新聞を讀んでいても、一度も罷業ひぎようという字に出会いません。僕はこれを妙に思いましたから、ある時またペップやチャックとゲエル家の晚餐に招かれた機会にこのことをなぜかと尋ねてみました。

「それはみんな食つてしまふのですよ。」

食後の葉巻をくわえたゲエルはいかにも無造作むぞうさにこう言いました。しかし「食つてしまふ」というのはなんのことだかわかりません。すると鼻目金はなめがねをかけたチャックは僕の不審を察したとみえ、横あいから説明を加えてくれました。

「その職工をみんな殺してしまつて、肉を食料に使うのです。ここにある新聞をごらん下さい。今月はちようど六万四千七百六十九匹の職工が解雇かいこされましたから、それだけ肉の値段も下がったわけですよ。」

「職工は黙つて殺されるのですか？」

「それは騒いでもしかたはありません。職工屠殺法しよつこうとぎつほうがあるのですから。」

これは山桃やまももの鉢植はちうえを後ろに苦い顔をしていたペップの言葉

です。僕はもちろん不快を感じました。しかし主人公のゲエルはもちろん、ペップやチャックもそんなことは当然と思つてい
るらしいのです。現にチャックは笑いながら、あざけるように
僕に話しかけました。

「つまり餓死がししたり自殺したりする手数を国家的に省略してや
るのですね。ちよつと有毒瓦斯ガスをかがせるだけですから、たい
した苦痛はありませんよ。」

「けれどもその肉を食うというのは、……」

「常談じょうだんを言つてはいけません。あのマグに聞かせたら、さぞ
大笑いに笑うでしょう。あなたの国でも第四階級の娘たちは売
笑婦になつてゐるではありませんか？ 職工の肉を食うことな
どに憤慨したりするのは感傷主義ですよ。」

こういふ問答を聞いていたゲエルは手近いテエブルの上にあつ

たサンドウィッチの皿を勧めながら、恬然^{てんぜん}と僕にこう言いました。

「どうです？ 一つとりませんか？ これも職工の肉ですがね。」
僕はもちろん辟易^{へきえき}しました。いや、そればかりではありません。ペップやチャックの笑い声を後ろにゲエル家の客間^{けかん}を飛び出しました。それはちようど家々の空に星明かりも見えない荒れ模様の夜です。僕はその闇^{やみ}の中を僕の住居^{すまい}へ帰りながら、のべつ幕なしに嘔吐^{へど}を吐きました。夜目にも白^{しら}じらと流れる嘔吐を。

九

しかし硝子^{ガラス}会社の社長のゲエルは人なつこい河童^{かっぱ}だったのに

違います。僕はたびたびゲエルといつしよにゲエルの属している倶楽部クラブへ行き、愉快に一晚を暮らしました。これは一つにはその倶楽部はトツクの属している超人倶楽部よりもはるかに居心いごころのよかったためです。のみならずまたゲエルの話は哲学者のマグの話のように深みを持っていなかっただにせよ、僕には全然新しい世界を、——広い世界をのぞかせました。ゲエルは、いつも純金の匙さじに珈琲カッフェの茶碗ちやわんをかきまわしながら、快活にいろいろの話をしたものです。

なんでもある霧の深い晩、僕は冬ふゆ薔薇そうびを盛った花瓶かびんを中にゲエルの話を聞いていました。それはたしか部屋へや全体はもちろん、椅子いすやテーブルも白い上に細い金の縁ふちをとったセセッション風の部屋だったように覚えています。ゲエルはふだんよりも得意そうに顔中に微笑をみなぎらせたまま、ちようどそのころ天下を

取っていた Quorax 党内閣のことなどを話しました。クオラックスという言葉はただ意味のない間投詞かんとうしですから、「おや」とでも訳すほかはありません。が、とにかく何よりも先に「河童全体の利益」ということを標榜ひょうぼうしていた政党だったので。

「クオラックス党を支配しているものは名高い政治家のロツペです。『正直は最良の外交である』とはビスマルクの言った言葉でしょう。しかしロツペは正直を内治ないちの上にも及ぼしているのです。……」

「けれどもロツペの演説は……」

「まあ、わたしの言うことをお聞きなさい。あの演説はもちろんことごとく謙うそです。が、謙うそということはだれでも知っていますから、畢竟ひっきょう正直と変わらないでしょう、それを一概に謙うそと言うのはあなたがただけの偏見ですよ。我々河童かっぱはあなたがたの

ように、……しかしそれはどうでもよろしい。わたしの話したいのはロツペのことです。ロツペはクオラツクス党を支配している、そのまたロツペを支配しているものは Pou-Fou 新聞の（この『プウ・フウ』という言葉もやはり意味のない間投詞かんとうしです。もし強いて訳すれば、『ああ』とでも言うほかはありません。）社長のクイクイです。が、クイクイも彼自身の主人というわけにはゆきません。クイクイを支配しているものはあなたの前にいるゲエルです。」

「けれども——これは失礼かもしれませんが、プウ・フウ新聞は労働者の味かたをする新聞でしょう。その社長のクイクイもあなたの支配を受けているというのは、……」

「プウ・フウ新聞の記者たちはもちろん労働者の味かたです。しかし記者たちを支配するものはクイクイのほかはありますま

い。しかもクイクイはこのゲエルの後援を受けずにはいられないのです。」

ゲエルは相変わらず微笑しながら、純金の匙さじをおもちやにしています。僕はこういうゲエルを見ると、ゲエル自身を憎むよりも、プウ・フウ新聞の記者たちに同情の起こるのを感じました。するとゲエルは僕の無言にたちまちこの同情を感じたとみえ、大きい腹をふくらませてこう言うのです。

「なに、プウ・フウ新聞の記者たちも全部労働者の味かたではありませんよ。少なくとも我々河童というものはだれの味かたをするよりも先に我々自身の味かたをしますからね。……しかしさらに厄介やっかいなことにはこのゲエル自身さえやはり他人の支配を受けているのです。あなたはそれをだれだと思えますか？ それはおわたしの妻ですよ。美しいゲエル夫人ですよ。」

ゲエルはおお声に笑いました。

「それはむしろしあわせでしょう。」

「とにかくわたしは満足しています。しかしこれもあなたの前だけに、——河童でないあなたの前だけに手放しで吹聴ふいちやうできるのです。」

「するとつまりクオラックス内閣はゲエル夫人が支配しているのですね。」

「さあそうも言われますかね。……しかし七年前まえの戦争などはたしかにある雌めすの河童のために始まったものに違いありません。」

「戦争？ この国にも戦争はあったのですか？」

「ありましたとも。将来もいつあるかわかりません。なにしろ隣国のある限りは、……」

僕は実際この時はじめて河童の国も国家的に孤立していない

ことを知りました。ゲエルの説明するところによれば、河童かっぱはいつもかわうそ獺を仮設敵そなにしているということ。しかも獺は河童に負けない軍備そなを具そなえているということ。僕はこの獺を相手に河童の戦争した話すいここうりやくに少なからず興味を感じました。（なにしろ河童の強敵に獺すいここうりやくのいるなどということは「水虎考略」の著者はもちろん、「山島民譚集」さんとうみんたんしゅうの著者柳田国男やなぎだくににおさんさえ知らずにい

たらしい新事実ですから。）

「あの戦争の起こる前にはもちろん両国とも油断せずじつと相手をうかがっていました。というのとはどちらも同じように手を恐怖おそしていたからです。そこへこの国めすにいた獺が一匹、ある河童の夫婦を訪問しました。そのまた雌めすの河童というのは亭主を殺すつもりでいたのです。なにしろ亭主は道楽者めすでしたからね。おまけに生命保険のついていたことも多少の誘惑めすになっ

たかもしれません。」

「あなたはその夫婦を御存じですか？」

「ええ、——いや、雄おすの河童だけは知っています。わたしの妻などはこの河童を悪人のように言っていますがね。しかしわたしに言わせれば、悪人よりもむしろ雌メスの河童につかまることを恐れている被害妄想ひがいもうぞうの多い狂人です。……そこでこの雌の河童は亭主のココアの茶碗ちやわんの中へ青化加里せいかりを入れておいたのです。それをまたどう間違まちがえたか、客の獺たに飲ませてしまったのです。獺たはもちろん死んでしまいました。それから……」

「それから戦争になったのですか？」

「ええ、あいにくその獺たは勲章を持っていたものですからね。」

「戦争はどちらの勝ちになったのですか？」

「もちろんこの国の勝ちになったのです。三十六万九千五百匹の

河童たちはそのために健気けなげにも戦死しました。しかし敵国に比べれば、そのくらいの損害はなんともありません。この国にある毛皮という毛皮はたいいてい獺の毛皮です。わたしもあの戦争の時には硝子ガラスを製造するほかにも石炭殻がらを戦地へ送りました。」

「石炭殻を何にするのですか？」

「もちろん食糧にするのです。我々は、河童は腹さえ減れば、なんでも食うのにきまっていますからね。」

「それは——どうか怒おこらずにください。それは戦地にいる河童たちには……我々の国では醜聞しゅうぶんですがね。」

「この国でも醜聞には違いありません。しかしわたし自身こう言っていれば、だれも醜聞にはしないものです。哲学者のマツグも言っているでしょう。『汝なんじの悪は汝自ら言え。悪はおのずから消滅すべし。』……しかもわたしは利益のほかにも愛国心に燃

え立っていたのですからね。」

ちようどそこへはいってきたのはこの倶楽部クラブの給仕です。給仕はゲエルにお時宜じぎをした後のち、朗読でもするように言いましました。

「お宅のお隣に火事がございます。」

「火——火事！」

ゲエルは驚いて立ち上がりました。僕も立ち上がったのはもちろんです。が、給仕は落ち着き払って次の言葉をつけ加えました。

「しかしもう消し止めました。」

ゲエルは給仕を見送りながら、泣き笑いに近い表情をしました。僕はこういう顔を見ると、いつかこの硝子会社ガラスの社長を憎んでいたことに気づきました。が、ゲエルはもう今では大資本

家でもなんでもなないただの河童かっぱになつて立つているのです。僕は花瓶かびんの中の冬薔薇ふゆそうびの花を抜き、ゲエルの手へ渡しました。

「しかし火事は消えたといつても、奥さんはさぞお驚きでしょう。さあ、これを持ってお帰りなさい。」

「ありがとうございます。」

ゲエルは僕の手を握りました。それから急ににやりと笑い、小声にこう僕に話しかけました。

「隣はわたしの家作かさくですからね。火災保険の金だけはとれるのですよ。」

僕はこの時のゲエルの微笑を——軽蔑けいべつすることもできなければ、憎悪ぞうおすることもできないゲエルの微笑をいまだにありありと覚えています。

「どうしたね？ きょうはまた妙にふさいでいるじゃないか？」
その火事のあつた翌日です。僕は巻煙草まきたばこをくわえながら、僕の客間の椅子いすに腰をおろした学生せいせいのラップにこう言いました。
実際またラップは右の脚あしの上へ左の脚をのせたまま、腐くちばしった嘴くちばしも見えないほど、ぼんやり床ゆかの上ばかり見ていたのです。

「ラップ君、どうしたね。」
四

「いや、なに、つまらないことなのですよ。——」

ラップはやつと頭をあげ、悲しい鼻声を出しました。

「僕はきょう窓の外を見ながら、『おや虫取り堇すみれが咲いた』と何気なにげなしにつぶやいたのです。すると僕の妹は急に顔色を変えたとすると、『どうせわたしは虫取り堇よ』と当たり前散らすじや

ありませんか？ おまけにまた僕のおふくろも大の妹鼻屑ですから、やはり僕に食ってかかるのです。」

「虫取り董が咲いたということはどうして妹さんには不快なのだね？」

「さあ、たぶん雄おすの河童をつかまえるという意味にでもとつたのでしよう。そこへおふくろと仲悪い叔母おばも喧嘩けんかの仲間入りをしたのですから、いよいよ大騒動になってしまいました。しかも年中酔っ払っているおやじはこの喧嘩を聞きつけると、たれかれの差別なしに殴り出したのです。それだけでも始末のつかないところへ僕の弟はその間あいだにおふくろの財布さいふを盗むが早いかな、キネマか何かを見にいつてしまいました。僕は……ほんとうに僕はもう、……」

ラップは両手に顔を埋めうず、何も言わずに泣いてしまいました。

僕の同情したのはもちろんです。同時にまた家族制度に対する詩人のトツクの軽蔑を思い出したのももちろんです。僕はラップの肩をたたき、一生懸命いっしょうけんめいに慰めました。

「そんなことはどこでもありがちだよ。まあ勇気を出したまえ。」

「しかし……しかしくちばし嘴でも腐つていなければ、……」

「それはあきらめるほかはないさ。さあ、トツク君の家うちへでも行こう。」

「トツクさんは僕を軽蔑けいべつしています。僕はトツクさんのように大胆に家族を捨てることができせんから。」

「じゃクラバツク君の家へ行こう。」

僕はその音楽会以来、クラバツクにも友だちになっていましたから、とにかくこの大音楽家の家へラップをつれ出すことにしました。クラバツクはトツクに比べれば、はるかに贅沢ぜいたくに暮ら

しています。というのは資本家のゲエルのように暮らしている
という意味ではありません。ただいろいろの骨董こつとうを、——タナ
グラの人形やペルシアの陶器を部屋へやいっぱいにならべた中にトル
コ風の長椅子ながいすを据すえ、クラバツク自身の肖像画の下にいつも子
どもたちと遊んでいるのです。が、きようはどうしたのか両腕
を胸へ組んだまま、苦い顔をしてすわっていました。のみなら
ずそのまた足もとには紙屑かみくずが一面に散らばっていました。ラッ
プも詩人トツクといっしょにたびたびクラバツクには会ってい
るはずです。しかしこの容子ようすに恐れたとみえ、きようは丁寧ていねいに
お時宜じぎをしたなり、黙もくつて部屋の隅すみに腰をおろしました。

「どうしたね？ クラバツク君。」

僕はほとんど挨拶あいさつの代わりにこう大音楽家へ問いかけました。
「どうするものか？ 批評家の阿呆あほうめ！ 僕の抒情詩じょじょうはトツク

の抒情詩と比べものにならないと言やがるんだ。」

「しかし君は音楽家だし、……」

「それだけならば我慢がまんもできる。僕はロックに比べれば、音楽家の名に値しないとやがるじゃないか？」

ロックというのはクラブバックとたびたび比べられる音楽家です。が、あいにく超人倶楽部クラブの会員になっていない関係上、僕は一度も話したことはありません。もつとも嘴その反り上がった、一癖ひとくせあるらしい顔だけはたびたび写真でも見かけていました。

「ロックも天才には違いない。しかしロックの音楽は君の音楽にあふれている近代的情熱を持っていない。」

「君はほんとうにそう思うか？」

「そう思うとも。」

するとクラバックは立ち上がるが早いのか、タナグラの人形を

ひつつかみ、いきなり床ゆかの上にたたきつけました。ラップはよほど驚いたとみえ、何か声をあげて逃げようと思いました。が、クラバツクはラップや僕にはちよつと「驚くな」という手真似てまねをした上、今度は冷やかにこう言うのです。

「それは君もまた俗人のように耳を持っていないからだ。僕はロツクを恐れている。……」

「君が？ 謙遜家けんそんかを気どるのはやめたまえ。」

「だれが謙遜家けんそんかを気どるものか？ 第一君たちに気どつて見せるくらいならば、批評家たちの前に気どつて見せている。僕は——クラバツクは天才だ。その点ではロツクを恐れていない。」

「では何を恐れているのだ？」

「何か正体しょうたいの知れないものを、——言わばロツクを支配している星を。」

「どうも僕には腑ぶに落ちないがね。」

「ではこう言えばわかるだろう。ロックは僕の影響を受けないが、僕はいつの間にかロックの影響を受けてしまうのだ。」

「それは君の感受性の……。」

「まあ、聞きたまえ。感受性などの問題ではない。ロックはいつも安んじてあいつだけにできる仕事をしている。しかし僕はいらいらするのだ。それはロックの目から見れば、あるいは一歩の差かもしれない。けれども僕には十哩マイルも違うのだ。」

「しかし先生の英雄曲は……。」

クラバツクは細い目をいつそう細め、いまいましそうにラツプをにらみつけました。

「黙りたまえ。君などに何がわかる？　僕はロックを知っているのだ。ロックに平身低頭する犬どもよりもロックを知っているのだ。」

るのだ。」

「まあ少し静かにしたまえ。」

「もし静かにしていただけるならば、……僕はいつもこう思っている。——僕らの知らない何ものかは僕を、——クラバツクをあざけるためにロックを僕の前に立たせたのだ。哲学者のマググはこういうことをなにもかも承知している。いつもあの色硝子いろガラスのランタアンの下に古ぼけた本ばかり読んでいるくせに。」

「どうして？」

「この近ごろマググの書いた『阿呆あほうの言葉』という本を見たまえ。——」

クラバツクは僕に一冊の本を渡す——というよりも投げつけました。それからまた腕を組んだまま、突つけんどんにこう言い放ちました。

「じゃきようは失敬しよう。」

僕はしよげ返つたラップといつしよにもう一度往来へ出ることにしました。人通りの多い往来は相変わらず毛生櫂ぶなの並み木のかげにいろいろの店を並べています。僕らはなんとということもなしに黙つて歩いてゆきました。するとそこへ通りかかったのは髪かみの長い詩人のトックです。トックは僕らの顔を見ると、腹はらの袋から手巾ハンケチを出し、何度も額ぬかをぬぐいました。

「やあ、しばらく会わなかつたね。僕はきようは久しぶりにクラバツクを尋ねようと思うのだが、……」

僕はこの芸術家たちを喧嘩けんかさせては悪いと思い、クラバツクのいかにも不機嫌ふきげんだったことを婉曲えんきよくにトックに話しました。

「そうか。じゃやめにしよう。なにしろクラバツクは神経衰弱だからね。……僕もこの二三週間は眠られないのに弱っている

のだ。」

「どうだね、僕らといつしよに散歩をしては？」

「いや、きょうはやめにしよう。おや！」

トツクはこう叫ぶが早いか、しつかり僕の腕をつかみました。しかもいつか体中からだじゅうに冷汗を流しているのです。

「どうしたのだ？」

「どうしたのです？」

「なにあの自動車の窓の中から緑いろの猿さるが一匹首を出したように見えたのだよ。」

僕は多少心配になり、とにかくあの医者いしやのチャックに診察してもらおうように勧めました。しかしトツクはなんと言っても、承知する気色けしきさえ見せません。のみならず何か疑わしそうに僕らの顔を見比べながら、こんなことさえ言い出すのです。

「僕は決して無政府主義者ではないよ。それだけはきつと忘れずにいてくれたまえ。——ではさようなら。チャックなどはまっぴらごめんだ。」

僕らはぼんやりたたずんだまま、トックの後ろ姿を見送っていました。僕らは——いや、「僕ら」ではありません。学生のラップはいつの間にか往来のまん中に脚をひろげ、しつぎりない自動車や人通りを股目金まためがねにのぞいているのです。僕はこの河童かっぱも発狂したかと思ひ、驚いてラップを引き起こしました。

「常談じょうだんじゃない。何をしている？」

しかしラップは目をこすりながら、意外にも落ち着いて返事をしました。

「いえ、あまり憂鬱ゆううつですから、さかさまに世の中をながめて見ただです。けれどもやはり同じことですね。」

十一

これは哲学者のマツグの書いた「阿呆あほうの言葉」の中の何章かです。——

×
阿呆はいつも彼以外のものを阿呆であると信じている。

×
我々の自然を愛するのは自然は我々を憎んだり嫉妬しつとしたりしないためもないことはない。

×
もつとも賢い生活は一時代の習慣を軽蔑けいべつしながら、しかもそのまた習慣を少しも破らないように暮らすことである。

我々のもつとも誇りたいものは我々の持つていないものだけである。

×

何びとも偶像を破壊することに異存を持つていないものはない。同時にまた何びとも偶像になることに異存を持つていないものはない。しかし偶像の台座の上に安んじてすわっていられるものはもつとも神々に恵まれたもの、——阿呆か、悪人か、英雄かである。（クラバツクはこの章の上へ爪つめの痕あとをつけていました。）

×

我々の生活に必要な思想は三千年前ぜんに尽きたかもしれない。我々はただ古い薪たきぎに新しい炎を加えるだけであろう。

×

我々の特色は我々自身の意識を超越するのを常としている。

×

幸福は苦痛を伴い、平和は倦怠けんたいを伴うとすれば、——？

×

自己を弁護することは他人を弁護することよりも困難である。
疑うものは弁護士を見よ。

×

矜誇きょうかう、愛欲、疑惑——あらゆる罪は三千年来、この三者から
発している。同時にまたおそらくはあらゆる徳も。

×

物質的欲望を減ずることは必ずしも平和をもたらさない。我々は平和を得るためには精神的欲望も減じなければならぬ。(クラバックはこの章の上にも爪つめの痕あとを残していました。)

×
我々は人間よりも不幸である。人間は河童かっぱほど進化してない。
（僕はこの章を読んだ時思わず笑ってしまいました。）

×
成すことは成し得ることであり、成し得ることは成すことである。
畢竟ひっきょう我々の生活はこういう循環論法を脱することはできない。
——すなわち不合理に終始している。

×

ボオドレエルは白痴になった後のち、彼の人生観をたった一語に、
——女陰の一語に表白した。しかし彼自身を語るものは必ずしも
こう言ったことではない。むしろ彼の天才に、——彼の生活を維持するに足る詩的天才に信頼したために胃袋の一語を忘れたことである。
（この章にもやはりクラバツクの爪の痕は残って

いました。)

×

もし理性に終始するとすれば、我々は当然我々自身の存在を否定しなければならぬ。理性を神にしたヴォルテエルの幸福に一生をおわったのはすなわち人間の河童よりも進化していかないことを示すものである。

十二

ある割合に寒い午後です。僕は「阿呆あほうの言葉」を読み飽きましたから、哲学者のマグを尋ねに出かけました。するとある寂しい町の角かどに蚊かどのようにやせた河童かっぱが一匹、ぼんやり壁によりかかっています。しかもそれは紛れもない、いつか僕の方

年筆を盗んでいった河童なのです。僕はしめたと思いましたが、ちようどそこへ通りかかった、たくましい巡査を呼びとめました。

「ちよつとあの河童を取り調べてください。あの河童はちようど一月ばかり前にわたしの万年筆を盗んだのですから。」

巡査は右手の棒をあげ、（この国の巡査は劍の代わりに水松の棒を持っているのです。）「おい、君」とその河童へ声をかけました。僕はあるいはその河童は逃げ出しはしないかと思つていました。が、存外落ち着き払つて巡査の前へ歩み寄りました。のみならず腕を組んだまま、いかにも傲然と僕の顔や巡査の顔をじろじろ見ているのです。しかし巡査は怒りもせず、腹の袋から手帳を出してきつそく尋問にとりかかりました。

「お前の名は？」

「グルツク。」

「職業は？」

「つい二三日前までは郵便配達夫をしていました。」

「よろしい。そこでこの人の申し立てによれば、君はこの人の万年筆を盗んでいったということだがね。」

「ええ、一月ばかり前に盗みました。」

「なんのために？」

「子どもの玩具おもちゃにしようと思ったのです。」

「その子どもは？」

「巡査ははじめて相手の河童へ鋭い目を注ぎました。」

「一週間前に死んでしまいました。」

「死亡証明書を持っているかね？」

「やせた河童は腹の袋から一枚の紙をとり出しました。巡査は

その紙へ目を通すと、急ににやにや笑いながら、相手の肩をたたきました。

「よろしい。どうも御苦労だったね。」

僕は呆氣あっけにとられたまま、巡査の顔をながめていました。しかもそのうちにやせた河童は何かぶつぶつぶやきながら、僕らを後ろにして行つてしまふのです。僕はやつと気を取り直し、こう巡査に尋ねてみました。

「どうしてあの河童をつかまえないのです？」

「あの河童は無罪ですよ。」

「しかし僕の万年筆を盗んだのは……」

「子どもの玩具にするためだったのでしょう。けれどもその子どもは死んでいるのです。もし何か御不審だったら、刑法千二百八十五条をお調べなさい。」

巡査はこう言いすてたなり、さつきとどこかへ行つてしまいました。僕はしかたがありませんから、「刑法千二百八十五条」を口の中に繰り返し、マツグの家うちへ急いでゆきました。哲学者のマツグは客好きです。現にきょうも薄暗い部屋へやには裁判官のペツプや医者なないろのチャックや硝子ガラス会社の社長のゲエルなどが集まり、七色の色硝子のランタアンの下に煙草たばこの煙を立ち昇のぼらせていました。そこに裁判官のペツプが来ていたのは何よりも僕には好こうつごうです。僕は椅子いすにかけるが早いか、刑法第千二百八十五条を検しらべる代わりにさつそくペツプへ問いかけました。

「ペツプ君、はなはだ失礼ですが、この国では罪人を罰しないのですか？」

ペツプは金口きんぐちの煙草の煙をまず悠々ゆうゆうと吹き上げてから、いかにもつまらなそうに返事をしました。

「罰しますとも。死刑さえ行なわれるくらいですからね。」

「しかし僕は一月ひとつきばかり前に、……」

僕は委細を話した後、例の刑法千二百八十五条のことを尋ねてみました。

「ふむ、それはこういうのです。——『いかなる犯罪を行ないたりといえども、該犯罪を行なわしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を処罰することを得ず』つまりあなたの場合で言えば、その河童かっぱはかつては親だったのですが、今はもう親ではありませんから、犯罪も自然と消滅するのです。」

「それはどうも不合理ですね。」

「常談じょうだんを言つてはいけません。親だつた河童も親である、河童も同一に見るのこそ不合理です。そうそう、日本の法律では同一に見ることになつてはいるのですね。それはどうも我々には滑稽こっけい

です。ふふふふふふふふふふ。」

ペップは巻煙草をほうり出しながら、気のない薄笑いをもらっていました。そこへ口を出したのは法律には縁の遠いチャックです。チャックはちよつと鼻目金はなめがねを直し、こう僕に質問しました。

「日本にも死刑はありますか？」

「ありますとも。日本では絞罪こうざいです。」

僕は冷然と構えこんだペップに多少反感を感じていましたから、この機会に皮肉を浴びせてやりました。

「この国の死刑は日本よりも文明的にできているでしょうね？」

「それはもちろん文明的です。」

ペップはやはり落ち着いていました。

「この国では絞罪などは用いられません。まれには電氣を用いるこ

ともあります。しかしたいていは電気も用いませぬ。ただその犯罪の名を言つて聞かせるだけです。」

「それだけで河童は死ぬのですか？」

「死にますとも。我々河童の神経作用はあなたがたのよりも微妙ですからね。」

「それは死刑ばかりではありません。殺人にもその手を使うのがあります——」

社長のゲエルは色硝子いろガラスの光に顔中紫に染まりながら、人なつこい笑顔えがおをして見せました。

「わたしはこの間もある社会主義者に『貴様は盗人ぬすびとだ』と言われたために心臓麻痺まひを起こしかかったものです。」

「それは案外多いようですね。わたしの知つていたある弁護士などはやはりそのため死んでしまつたのですからね。」

僕はこう口を入れた河童、——哲学者のマグをふりかえりました。マグはやはりいつものように皮肉な微笑を浮かべたまま、だれの顔も見ずにしゃべっているのです。

「その河童はだれかに蛙かえるだと言われ、——もちろんあなたも御承知でしょう、この国で蛙だと言われるのは人非人にんびにんという意味になることぐらいは。——己おれは蛙かな？ 蛙ではないかな？ と毎日考えているうちにとうとう死んでしまったものです。」

「それはつまり自殺ですね。」

「もつともその河童を蛙だと言ったやつは殺すつもりで言ったのですがね。あなたがたの目から見れば、やはりそれも自殺という……。」

ちょうどマグがこう言った時です。突然その部屋へやの壁の向こうに、——たしかに詩人のトックの家いえに鋭いピストルの音が

一発、空気をはね返すように響き渡りました。

十三

僕らはトツクの家へ駆けつけました。トツクは右の手にピストルを握り、頭の皿から血を出したまま、高山植物の鉢植はちうえの中に仰向けあおむになって倒れていました。そのまたそばには雌めすの河童が一匹、トツクの胸に顔を埋めうず、大声をあげて泣いていました。僕は雌の河童を抱き起こしながら、(いったい僕はぬらぬらする河童の皮膚に手を触れることをあまり好んではないのですか。)「どうしたのです?」と尋ねました。

「どうしたのだから、わかりません。ただ何か書いていたと思うと、いきなりピストルで頭を打つたのです。ああ、わたしはど

うしましょう？ qur-r-r-r, qur-r-r-r」(これは河童の泣き声です。)

「なにしろトック君はわがままだったからね。」

硝子会社の社長のゲエルは悲しそうに頭を振りながら、裁判官ガラスのペップにこう言いました。しかしペップは何も言わずに金口まきたばこの巻煙草に火をつけていました。すると今までひざまずいて、トックの創口きずぐちなどを調べていたチャックはいかにも医者らしい態度をしたまま、僕ら五人に宣言しました。(実はひとりと四匹しひきとです。)

「もう駄目だめです。トック君は元来胃病でしたから、それだけでも憂鬱ゆううつになりやすかったのです。」

「何か書いていたということですが。」

哲学者のマグは弁解するようにこう独り語ひとごとをもらしながら、

机の上の紙をとり上げました。僕らは皆頸くびをのぼし、（もつとも僕だけは例外です。）幅の広いマツグの肩越しに一枚の紙をのぞきこみました。

「いざ、立ちてゆかん。娑婆界しゃばかいを隔つる谷へ。

岩むらはごごしく、やま水は清く、

薬草の花はにおえる谷へ。」

マツグは僕らをふり返りながら、微笑笑ほろほろといっしよにこう言いました。

「これはゲエテの『ミニヨンの歌』の剽窃ひょうせつですよ。するとトツク君の自殺したのは詩人としても疲れていたのですね。」

そこへ偶然自動車を乗りつけたのはあの音楽家のクラバツクです。クラバツクはこういう光景を見ると、しばらく戸口にたたずんでいました。が、僕らの前へ歩み寄ると、怒鳴どなりつける

ようにマッグに話しかけました。

「それはトックの遺言状ゆいごんじょうですか？」

「いや、最後に書いていた詩です。」

「詩？」

やはり少しも騒がないマッグは髪を逆立さかだてたクラバックにトックの詩稿を渡しました。クラバックはあたりには目もやらずに熱心にその詩稿を読み出しました。しかもマッグの言葉にはほとんど返事さえしないのです。

「あなたはトック君の死をどう思いますか？」

「いざ、立ちて、……僕もまたいつ死ぬかわかりません。……
娑婆界しゃぱかいを隔つる谷へ。……」

「しかしあなたはトック君とはやはり親友のひとりだったの
でしょう？」

「親友？ トックはいつも孤独だったのです。……娑婆界を隔つる谷へ、……ただトックは不幸にも、……岩むらはこごしく……」

「不幸にも？」

「やま水は清く、……あなたがたは幸福です。……岩むらはこごしく。……」

僕はいまだに泣き声を絶たない雌めすの河童かっぱに同情しましたから、そつと肩を抱かかえるようにし、部屋へやの隅すみの長椅子ながいすへつれていきました。そこには二歳か三歳かの河童が一匹、何も知らずに笑っているのです。僕は雌の河童の代わりに子どもこどもの河童をあやしてやりました。するといつか僕の目にも涙のたまるのを感じました。僕が河童の国に住んでいるうちに涙というものをこぼしたのは前にもあとにもこの時だけです。

「しかしこういうわがままの河童といっしょになつた家族は気

の毒ですね。」

「なにしろあとのことも考えないのですから。」

裁判官のペツプは相変わらず、新しい巻煙草まきたばこに火をつけながら、資本家のゲエルに返事をしていました。すると僕らを驚かせたのは音楽家のクラバツクのおお声です。クラバツクは詩稿を握ったまま、だれにもなしに呼びかけました。

「しめた！ すばらしい葬送曲ができるぞ。」

クラバツクは細い目をかがやかせたまま、ちよつとマツグの手を握ると、いきなり戸口へ飛んでいきました。もちろんもうこの時には隣近所の河童が大勢、トツクの家うちの戸口に集まり、珍しそうに家の中をのぞしやにむにいているのです。しかしクラバツクはこの河童たちを遮しやにむに二無二左右へ押しおのけるが早いか、ひらりと自動車へ飛び乗りました。同時にまた自動車は爆音を立ててた

ちまちどこかへ行つてしまいました。

「こら、こら、そうのぞいてはいかん。」

裁判官のペツプは巡査の代わりに大勢の河童かっぱを押し出した後、のちトツクトツクの家の戸をしめてしまいました。部屋へやの中はそのせいか急いそにひつそりなつたものです。僕らはこういう静かさの中に——高山植物の花の香に交じつたトツクトツクの血の匂においの中に後始末あとしまつのことなどを相談しました。しかしあの哲学者のマツグだけはトツクトツクの死骸しかいをながめたまま、ぼんやり何か考えています。僕はマツグマツグの肩をたたき、「何を考えているのです？」と尋ねました。

「河童の生活というものをね。」

「河童の生活がどうなるのです？」

「我々河童はなんと言つても、河童の生活をまつとうするためには、……」

マグは多少はずかしそうにこう小声でつけ加えました。

「とにかく我々河童以外の何ものかの力を信ずることですね。」

一四

僕に宗教というものを思い出させたのはこういうマグの言葉です。僕はもちろん物質主義者ですから、真面目まじめに宗教を考えたことは一度もなかったのに違いありません。が、この時はトックの死にある感動を受けていたためにいつたい河童の宗教はなんであるかと考え出したのです。僕はさっそく学生のラップにこの問題を尋ねてみました。

「それはキリストきょう基督教、はいかきょう仏教、モハメット教、はいかきょう拝火教なども行なわれています。まず一番勢力のあるものはなんといいっても近代教で

しょう。生活教とも言いますがね。」（「生活教」という訳語は当たっていないかもしれません。この原語は Quemoocha じゃ。cha は英吉利語の ism という意味に当たるでしょう。quemoo の原形 quemal の訳は単に「生きる」というよりも「飯を食ったり、酒を飲んだり、交合こうごうを行なったり」する意味です。）

「じゃこの国にも教会だの寺院だのはあるわけなのだね？」

「常談じょうだんを言っではいけません。近代教の大寺院などはこの国第一の大建築ですよ。どうです、ちよつと見物に行つては？」

ある生温なまあたかい曇天とんてんの午後、ラップは得々とくとくと僕といつしよにこの大寺院へ出かけました。なるほどそれはニコライ堂の十倍もある大建築です。のみならずあらゆる建築様式を一つに組み上げた大建築です。僕はこの大寺院の前に立ち、高い塔や円屋根まるねをながめた時、なにか無気味にさえ感じました。実際それらは

天に向かつて伸びた無数の触手のように見えたものです。僕らは玄関の前にたたずんだまま、（そのまた玄関に比べてみても、どのくらい僕らは小さかったのでしょうか！）しばらくこの建築よりもむしろ途方もない怪物に近い稀代の大寺院を見上げていました。

大寺院の内部もまた広大です。そのコリント風の円柱の立つた中には参詣人が何人も歩いていました。しかしそれらは僕らのように非常に小さく見えたものです。そのうちに僕らは腰の曲がつた一匹の河童に出合いました。するとラップはこの河童にちよつと頭を下げた上、丁寧にかう話しかけました。

「長老、御達者なのは何よりもです。」

相手の河童もお時宜をした後、やはり丁寧に返事をしました。「これはラップさんですか？ あなたも相変わらず、——（と

言いかけながら、ちよつと言葉をつがなかつたのはラップの嘴くちばしの腐っているのにやつと気がついたためだつたでしょう。——ああ、とにかく御丈夫らしいようですね。が、きようはどうしてまた……」

「きようはこの方かたのお伴をしてきたのです。この方はたぶん御承知のとおり、——」

それからラップは滔々とうとうと僕のことを話しました。どうもまたそれはこの大寺院へラップがめつたに來ないことの弁解にもなつていたらしいのです。

「ついてはどうかこの方の御案内を願いたいと思うのですが。」
長老は大様おおように微笑しながら、まず僕に挨拶あいさつをし、静かに正しょうめん面の祭壇を指さしました。

「御案内と申しても、何もお役に立つことはできません。我々

信徒の礼拝らいはいするのは正面の祭壇にある『生命の樹き』です。『生命の樹』にはごらんとおり、金と緑との果みがなっています。あの金の果を『善の果』と言い、あの緑の果を『悪の果』と言います。……」

僕はこういう説明のうちにもう退屈を感じ出しました。それはせつかくの長老の言葉も古い比喩ひゆのように聞こえたからです。僕はもちろん熱心に聞いている容子ようすを装っていました。が、時々は大寺院の内部へそつと目をやるのを忘れずにいました。

コリント風の柱、ゴシック風の穹窿きゆうりゆう、アラビアじみた市松模様いちまつの床ゆか、セセッションまがいの祈祷机きとうづくえ、——こういうものの作っている調和は妙に野蛮な美を具そなえていました。しかし僕の目をひいたのは何よりも両側の龕がんの中にある大理石の半身像です。僕は何かそれらの像を見知っているように思いました。それも

また不思議ではありません。あの腰の曲つた河童は「生命の樹」の説明をおわると、今度は僕やラップといっしょに右側の龕の前へ歩み寄り、その龕の中の半身像にこういう説明を加え出しました。

「これは我々の聖徒のひとり、——あらゆるものに反逆した聖徒ストリントベリイです。この聖徒はさんざん苦しんだあげく、スウエデンボルグの哲学のために救われたように言われています。が、実は救われなかったのです。この聖徒はただ我々のように生活教を信じていました。——というよりも信じるほかはなかったでしょう。この聖徒の我々に残した『伝説』という本を読んでごらん下さい。この聖徒も自殺未遂者だったことは聖徒自身告白しています。」

僕はちよつと憂鬱になり、次の龕へ目をやりました。次の龕

にある半身像は口髭くちひげの太い独逸人ドイッです。

「これはツアラトストラの詩人ニイチエです。その聖徒は聖徒自身の造った超人に救いを求めました。が、やはり救われずに気違いになつてしまつたのです。もし気違いにならなかつたとすれば、あるいは聖徒の数かずへはいることもできなかつたかもしれません。……」

長老はちよつと黙つた後のち、第三の龕がんの前へ案内しました。

「三番目にあるのはトルストイです。この聖徒はだれよりも苦行をしました。それは元来貴族だつたために好奇心の多い公衆に苦しみを見せることをきらつたからです。この聖徒は事実上信ぜられない基督キリストを信じようと努力しました。いや、信じているようにさえ公言したこともあつたのです。しかしとうとう晩年には悲壯な諷うそつきだつたことに堪たえられないようになりまし

た。この聖徒も時々書齋の梁はりに恐怖を感じたのは有名です。けれども聖徒の数にはいつているくらいですから、もちろん自殺したわけではありません。」

第四の龕の中の半身像は我々日本人のひとりです。僕はこの日本人の顔を見た時、さすがに懐なつかしさを感じました。

「これは国木田独歩くにきだどつぽです。轢死れきしする人足にんそくの心もちをはつきり知っていた詩人です。しかしそれ以上の説明はあなたには不必要に違いありません。では五番目の龕の中をごらんください。——」

「これはワグネルではありませんか？」

「そうです。国王の友だちだった革命家です。聖徒ワグネルは晩年には食前の祈祷きとうさえしていました。しかしもちろん基督教よりも生活教の信徒のひとりだったのです。ワグネルの残した手紙によれば、娑婆苦しやばくは何度この聖徒を死の前に駆りやったか

わかりません。」

僕らはもうその時には第六の龕がんの前に立っていました。

「これは聖徒ストリントベリーの友だちです。子どもの大勢ある細君フランスの代わりに十三四のクイティの女をめとつた商売人上りの仏蘭西の画家です。この聖徒は太い血管の中に水夫の血を流していました。が、唇くちびるをごらんなさい。砒素ひそか何かの痕あとが残っています。第七の龕の中にあるのは……もうあなたはお疲れでしょう。ではどうかこちらへおいでください。」

僕は実際疲れていましたから、ラップといつしよに長老に従い、香こうの匂においのする廊下伝いにある部屋へやへはいました。そのまた小さい部屋の隅すみには黒いヴェヌスの像の下に山葡萄やまぶどうが一ふさ献じてあるのです。僕はなんの装飾もない僧房を想像していただけにちよつと意外に感じました。すると長老は僕の容子ようすに

こういう気もちを感じたとみえ、僕らに椅子いすを薦すすめる前に半ば
気の毒そうに説明しました。

「どうか我々の宗教の生活教であることを忘れずにください。
我々の神、——『生命きの樹』の教えは『旺盛おうせいに生きよ』という
のですから。……ラップさん、あなたはこのかたに我々の聖書
をごらんにいれましたか？」

「いえ、……実はわたし自身もほとんど読んだことはないの
です。」

ラップは頭さくらの皿かを搔かきながら、正直にこう返事をしました。
が、長老は相変わらず静かに微笑して話しつづけました。

「それではおわかりなりますまい。我々の神は一日のうちここ
の世界を造りました。（『生命きの樹』は樹というものの、成しあ
たわないことはないのです。）のみならず雌めすの河童かっぱを造りまし

た。すると雌の河童は退屈のあまり、雄おすの河童を求めました。我々の神はこの嘆きを憐れみあわ、雌の河童の脳髓のうずいを取り、雄の河童を造りました。我々の神はこの二匹の河童に『食えよ、交合せよ、旺盛おうせいに生きよ』という祝福を与えました。……」

僕は長老の言葉のうちに詩人のトツクを思い出しました。詩人のトツクは不幸にも僕のように無神論者です。僕は河童ではありませんから、生活教を知らなかったのも無理はありません。けれども河童の国に生まれたトツクはもちろん「生命の樹」を知っていたはずです。僕はこの教えに従わなかったトツクの最後を憐れみましたから、長老の言葉をさえぎるようにトツクのことを話し出しました。

「ああ、あの気の毒な詩人ですね。」

長老は僕の話聞き、深い息をもらしました。

「我々の運命を定めるものは信仰と境遇と偶然とだけです。（もつともあなたがたはそのほかに遺伝をお数えなさるでしょう。）トックさんは不幸にも信仰をお持ちにならなかつたのです。」

「トックはあなたをうらやんでいたでしょう。いや、僕もうらやんでいます。ラップ君などは年も若いし、……」

「僕もくちばし嘴さえちやんとしていればあるいは楽天的だつたかもしれませぬ。」

長老は僕らにこう言われると、もう一度深い息をもらしました。しかもその目は涙ぐんだまま、じつと黒いヴェヌスを見つめているのです。

「わたしも実は、——これはわたしの秘密ですから、どうかだれにもおつしやらずにください。——わたしも実は我々の神を信ずるわけにいかないのです。しかしいつかわたしのきとう祈祷は、

ちようど長老のこう言つた時です。突然部屋へやの戸があいたと思ふと、大きい雌の河童が一匹、いきなり長老へ飛びかかりました。僕らがこの雌の河童を抱きとめようとしたのはもちろんです。が、雌の河童はとつさの間あいだに床ゆかの上へ長老を投げ倒しました。

「この爺おやじめ！ きようもまたわたしの財布さいふから一杯やる金かねを盗んでいったな！」

十分ばかりたつた後のち、僕らは實際逃げ出さなればかりに長老夫婦をあとに残し、大寺院の玄関おを下りていきました。

「あれではあの長老も『生命の樹』を信じないはずですね。」

しばらく黙つて歩いた後、ラップは僕にこう言いました。が、僕は返事をするよりも思わず大寺院を振り返りました。大寺院

はどんより曇った空にやはり高い塔や円屋根まるやねを無数の触手のように伸ばしています。なにか沙漠さばくの空に見える蜃気楼しんきろうの無気味さを漂わせたまま。……

一五

それからかれこれ一週間の後、僕はふと医者うぢのチャックに珍しい話を聞きました。というのはあのトックうぢの家に幽霊の出るといふ話なのです。そのころにはもう雌めすの河童かっぱはどこかほかへ行つてしまい、僕らの友だちの詩人の家も写真師のステュディオに変わっていました。なんでもチャックの話によれば、このステュディオでは写真をとると、トックの姿もいつの間まにか必ず朦朧もうろうと客の後ろに映つていたりとかいうことです。もつともチャック

は物質主義者ですから、死後の生命などを信じていません。現にその話をした時にも悪意のある微笑を浮かべながら、「やはり靈魂というものも物質的存在とみえますね」などと註釈めいたことをつけ加えていました。僕も幽霊を信じないことはチャックとあまり変わりません。けれども詩人のトックには親しみを感じていましたから、さっそく本屋の店へ駆けつけ、トックの幽霊に関する記事やトックの幽霊の写真の出ている新聞や雑誌を買ってきました。なるほどそれらの写真を見ると、どこかトックらしい河童が一匹、ろうにやくなんによ老若男女の河童の後ろにぼんやりと姿を現わしていました。しかし僕を驚かせたのはトックの幽霊の写真よりもトックの幽霊に関する記事、——ことにトックの幽霊に関する心霊学協会の報告です。僕はかなり逐語的にその報告を訳しておきましたから、しも下に大略を掲げることにしませう。

ただし括弧かっこの中にあるのは僕自身の加えた註釈なのです。――

詩人トック君の幽霊に関する報告。(心霊学協会雑誌第八千二百七十四号所載)

わが心霊学協会は先般自殺したる詩人トック君の旧居にして現在は××写真師のステュディオなる□□街第二百五十一号に臨時調査会を開催せり。列席せる会員は下しものごとし。(氏名を略す。)

我ら十七名の会員は心霊協会会長ペック氏とともに九月十七日午前十時三十分、我らのもつとも信頼するメディアム、ホップ夫人を同伴し、該がいステュディオの一室に参集せり。ホップ夫人は該ステュディオにはいるや、すでに心霊的空気を感じ、全身に痙攣けいれんを催しつつ、嘔吐おうとすること数回に及べり。夫人の語るところによれば、こは詩人トック君の強烈なる煙草たばこを愛したる

結果、その心霊的空気もまたニコティンを含有するためなりと
いう。

我ら会員はホップ夫人とともに円卓をめぐりて黙坐もくざしたり。
夫人は三分二十五秒の後のち、きわめて急劇なる夢遊状態に陥り、
かつ詩人トック君の心霊の憑依ひょういするところとなれり。我ら会員
は年齢順に従い、夫人に憑依せるトック君の心霊と左のごとき
問答を開始したり。

問 君は何ゆえに幽霊に出いずるか？

答 死後の名声を知らんがためなり。

問 君——あるいは心霊諸君は死後もなお名声を欲するや？

答 少なくとも予よは欲せざるあたわず。しかれども予よの邂逅かいこう
したる日本の一詩人のごときは死後の名声を軽蔑けいべつしたり。

問 君はその詩人の姓名を知れりや？

答 予は不幸にも忘れたり。ただ彼の好んで作れる十七字詩の一章を記憶するのみ。

問 その詩は如何いかん？

答 「古池や蛙かわず飛びこむ水の音」。

問 君はその詩を佳作なりとなすや？

答 予よは必ずしも悪作なりとなさず。ただ「蛙かわず」を「河童かっぱ」と

せんか、さらに光彩陸離こうさいりくりたるべし。

問 しからばその理由は如何いかん？

答 我ら河童はいかなる芸術にも河童を求むること痛切なればなり。

会長ペック氏はこの時にあたり、我ら十七名の会員にこは心霊学協会の臨時調査会にして合評会がつびようかいにあらざるを注意したり。

問 心霊諸君の生活は如何？

答 諸君の生活と異なることなし。

問 しからば君は君自身の自殺せしを後悔するや？

答 必ずしも後悔せず。予は心靈的生活に倦まば、さらにピストルを取りて自活すべし。

問 自活するは容易なりや否や？

トツク君の心靈はこの問に答うるにさらに問をもつてしたり。

こはトツク君を知れるものにはすこぶる自然なる応酬おうしゅうなるべし。

答 自殺するは容易なりや否や？

問 諸君の生命は永遠なりや？

答 我らの生命に關しては諸説紛々ふんぷんとして信ずべからず。幸

いに我らの間にも基督教キリストきよう、仏教、モハメット教、拜火教等の諸

宗あることを忘るるなかれ。

問 君自身の信ずるところは？

答 予は常に懷疑主義者なり。

問 しかれども君は少なくとも心霊の存在を疑わざるべし？

答 諸君のごとく確信するあたわず。

問 君の交友の多少は如何？

答 予の交友は古今東西にわたり、三百人を下らざるべし。

その著名なるものをあぐれば、クライスト、マインレンデル、ワイニンゲル……

問 君の交友は自殺者のみなりや？

答 必ずしもしかりとせず。自殺を弁護せるモンテエニユのごときは予が畏友いゆうの一人いちにんなり。ただ予は自殺せざりし厭世主義えんせい者、——シヨオペンハウエルの輩はいとは交際せず。

問 シヨオペンハウエルは健在なりや？

答 彼は目下もっか心霊的厭世主義を樹立し、自活じかつする可否を論じ

つつあり。しかれどもコレラも黴菌病ばいきんびょうなりしを知り、すこぶる安堵あんどせるものごとし。

我ら会員は相次いでナポレオン、孔子こうし、ドストエフスキイ、ダ
アウイン、クレオパトラ、釈迦しゃか、デモステネス、ダンテ、千せんの
利休等りきゅうの心霊の消息を質問したり。しかれどもトツク君は不幸
にも詳細に答うることをなさず、かえつてトツク君自身に關す
る種々のゴシップを質問したり。

問 予よの死後の名聲は如何いかん？

答 ある批評家は「群小詩人のひとり」と言えり。

問 彼は予が詩集を贈らざりしに怨恨えんこんを含めるひとりなるべ
し。予の全集は出版せられしや？

答 君の全集は出版せられたれども、売行きはなほだ振わざ
るがごとし。

問 予の全集は三百年の後、——すなわち著作権の失われた
後、万人の購ばんにん あがなうところとなるべし。予の同棲どうせいせる女友だちは
如何？

答 彼女は書肆しよしラック君の夫人となれり。

問 彼女はいまだ不幸にもラックの義眼なるを知らざるなる
べし。予が子は如何？

答 国立孤児院にありと聞けり。

トック君はしばらく沈黙せる後、新たに質問を開始したり。

問 予が家は如何？

答 某写真師のステュディオとなれり。

問 予の机はいかになれるか？

答 いかなれるかを知るものなし。

問 予は予の机の抽斗ひきだしに予の秘蔵ひとたばせる一束の手紙を——しか

れどもこは幸いにも多忙なる諸君の関するところにあらず。今やわが心霊界はおもむろに薄暮に沈まんとす。予は諸君と訣別すべし。さらば。諸君。さらば。わが善良なる諸君。

ホップ夫人は最後の言葉とともにふたたび急劇に覚醒したり。我ら十七名の会員はこの問答の真なりしことを上天の神に誓つて保証せんとす。(なおまた我らの信賴するホップ夫人に対する報酬はかつて夫人が女優たりし時の日当に従いて支弁したり。)

一六

僕はこういう記事を読んだ後、だんだんこの国にいることも憂鬱になつてきましたから、どうか我々人間の国へ帰ることにしたいと思ひました。しかしいくら探して歩いて、僕の落ち

た穴は見つかりません。そのうちにあのバッグという漁夫りょうしの河童の話には、なんでもこの国の街まちはずれにある年をとった河童が一匹、本を読んだり、笛ふえを吹いたり、静かに暮らしているということです。僕はこの河童に尋ねてみれば、あるいはこの国を逃げ出す途みちもわかりはしないかと思いましたが、さつそく街はずれへ出かけてゆきました。しかしそこへ行ってみると、いかにも小さい家の中に年をとった河童どころか、頭の皿も固まらない、やつと十二三の河童が一匹、悠々ゆうゆうと笛を吹いていました。僕はもちろん間違まちがった家へはいったではないかと思いましたが、念のために名をきいてみると、やはりバッグの教えてくれた年よりの河童に違いないのです。

「しかしあなたは子どものようですが……」

「お前さんはまだ知らないのかい？ わたしはどういう運命か、

母親の腹を出た時には白髪頭しらがあたまをしていたのだよ。それからだんだん年が若くなり、今ではこんな子どもになったのだよ。けれども年を勘定すれば生まれる前を六十としても、かれこれ百十五六にはなるかもしれない。」

僕は部屋へやの中を見まわしました。そこには僕の気のせいか、質素な椅子いすやテーブルの間何か清らかな幸福が漂っているように見えるのです。

「あなたはどうもほかの河童よりもしあわせに暮らしているようにですね？」

「さあ、それはそうかもしれない。わたしは若い時は年よりだつたし、年をとった時は若いものになっている。従つて年よりのように欲にも渴かわかず、若いもののように色にもおぼれない。とにかくわたしの生涯はたといしあわせではないにしろ、安ら

かだつたのには違いあるまい。」

「なるほどそれでは安らかでしょう。」

「いや、まだそれだけでは安らかにはならない。わたしは体もからだ丈夫じょうぶだったし、一生食うに困らぬくらいの財産を持っていたのだよ。しかし一番しあわせだったのはやはり生まれてきた時に年よりだったことだと思っている。」

僕はしばらくこの河童かっぱと自殺したトックの話だの毎日医者に見てもらっているゲエルの話だのをしていました。が、なぜか年をとった河童はあまり僕の話などに興味のないような顔をしていました。

「ではあなたはほかの河童のように格別生きていることに執着しゅうじやくを持つてはいないのですね？」

年をとった河童は僕の顔を見ながら、静かにこう返事をしま

した。

「わたしもほかの河童のようにこの国へ生まれてくるかどうか、一応父親に尋ねられてから母親の胎内を離れたのだよ。」

「しかし僕はふとした拍子に、この国へ転ころげ落ちてしまったのです。どうか僕にこの国から出ていかれる路みちを教えてください。」
「出ていかれる路は一つしかない。」

「というのは？」

「それはお前さんのここへ来た路だ。」

僕はこの答えを聞いた時になぜか身の毛がよだちました。

「その路があいにく見つからないのです。」

年をとった河童は水々しい目にじつと僕の顔を見つめました。それからやつと体からだを起こし、部へ屋やの隅すみへ歩み寄ると、天井からそこに下がっていた一本の綱つなを引きました。すると今まで気の

つかなかつた天窓が一つ開きました。そのまた円まるい天窓の外には松や檜ひのきが枝を張つた向こうに大空が青あおと晴れ渡つています。いや、大きい鏟やじりに似た槍やりヶ岳たけの峯もそびえています。僕は飛行機を見た子どものように実際飛び上がつて喜びました。

「さあ、あすここから出ていくがいい。」

年をとつた河童はこう言いながら、さつきの綱を指さしました。今まで僕の綱と思つていたのは実は綱梯子つなばしにできていたのです。

「ではあすここから出さしてもらいます。」

「ただわたしは前もつて言うがね。出ていつて後悔しないように。」

「大丈夫だいじょうぶです。僕は後悔などはしません。」

僕はこう返事をするが早いかな、もう綱梯子をよじ登つていま

した。年をとった河童の頭の皿をはるか下にながめながら。

一七

僕は河童かつぼの国から帰つてきた後のち、しばらくは我々人間の皮膚の匂においに閉口しました。我々人間に比べれば、河童は実に清潔なものです。のみならず我々人間の頭は河童ばかり見ていた僕にはいかにも気味の悪いものに見えました。これはあるいはあなたにはおわかりにならないかもしれないかもしれません。しかし目や口はともかくも、この鼻というものは妙に恐ろしい気を起こさせるものです。僕はもちろんできるだけ、だれにも会わない算段をしました。が、我々人間にもいつか次第に慣れ出したとみえ、半年ばかりたつうちにどこへでも出るようになりました。ただ

それでも困ったことは何か話をしていゝうちのうちかり河童の国の言葉を口に出してしまふことです。

「君はあしたは家うちにいるかね？」

「Qua」

「なんだつて？」

「いや、いるということだよ。」

だいたいこういう調子だったものです。

しかし河童の国から帰つてきた後、ちようど一年ほどたった時、僕はある事業の失敗したために……（S博士はかせは彼がこう言つた時、「その話はおよしなさい」と注意をした。なんでも博士の話によれば、彼はこの話をするたびに看護人の手にもおえないくらい、乱暴になるとかいうことである。）

ではその話はやめましょう。しかしある事業の失敗したため

に僕はまた河童の国へ帰りたいたいと思い出しました。そうです。「行きたい」^ゆのではありません。「帰りたいたい」と思い出したのです。河童の国は当時の僕には故郷のように感ぜられましたから。僕はそつと家^{うち}を脱け出し、中央線の汽車へ乗ろうとしました。そこをあいにく巡査につかまり、とうとう病院へ入れられたのです。僕はこの病院へはいつた当座も河童の国のことを想^{おも}いつづけました。医者^{なないろ}のチャックは^{いろガラス}どうしているでしょう？ 哲学者のマグも相変わらず七色の色硝子のランタアンの下に何か考えているかもしれませぬ。ことに僕の親友^{くちばし}だった腐った学生^{りようし}のラップは、——あるきょうのように曇った午後です。こんな追憶にふけていた僕は思わず声をあげようと思いました。それはいつの間^まにはいつてきたか、バッグという漁夫^{りようし}の河童が一匹、僕の前にたたずみながら、何度も頭を下げていたからで

す。僕は心を取り直した後、——泣いたか笑ったかも覚えていません。が、とにかく久しぶりに河童の国の言葉を使うことに感動していたことはたしかです。

「おい、バツグ、どうして来た？」

「へい、お見舞いに上がったのです。なんでも御病気だとかいうことですから。」

「どうしてそんなことを知っている？」

「ラディオのニュースで知ったのです。」

バツグは得意そうに笑っているのです。

「それにしてもよく来られたね？」

「なに、造作ぞうさはありません。東京の川や掘割りは河童には往来

も同様ですから。」

僕は河童かっぱも蛙かえるのように水陸両棲りょうせいの動物だったことに今さらの

ように気がつきました。

「しかしこの辺には川はないがね。」

「いえ、こちらへ上がつたのは水道の鉄管を抜けてきたのです。それからちよつと消火栓しょうかせんをあけて……」

「消火栓をあけて？」

「旦那だんなはお忘れなすつたのですか？　河童にも機械屋のいると
いうことを。」

それから僕は二三日ごとにいろいろの河童の訪問を受けました。僕の病はS博士はかせによれば早発性痴呆症そうはつせいちほうしやうということでした。しかしあの医者いしやのチャックは（これははなはだあなたにも失礼に当たるとは違ひありません。）僕は早発性痴呆症患者ではない、早発性痴呆症患者はS博士をはじめ、あなたがた自身だと言つていました。医者いしやのチャックも来るくらいですから、学生のラッ

プや哲学者のマグの見舞いにきたことはもちろんです。が、あの漁夫りょうしのバッグのほかに昼間はだれも尋ねてきません。ことに二三匹いっしょに来るのは夜、——それも月のある夜です。僕はゆうべも月明りの中に硝子会社ガラスの社長のゲエルや哲学者のマグと話をしました。のみならず音楽家のクラバツクにもヴァイオリンを一曲弾ひいてもらいました。そら、向こうの机の上に黒百合くろゆりの花束がのっているでしょう？ あれもゆうべクラバツクが土産みやげに持ってきてくれたものです。……

（僕は後ろを振り返ってみた。が、もちろん机の上には花束も何ものつていなかっただ。）

それからこの本も哲学者のマグがわざわざ持ってきてくれたものです。ちよつと最初の詩を読んでごらん下さい。いや、あなたは河童の国の言葉を御存知になるはずはありません。で

は代わりに読んでみましょう。これは近ごろ出版になったトツク
の全集の一冊です。――

（彼は古い電話帳をひろげ、こういう詩をおお声に読みはじめた。）

――椰子やしの花や竹の中に

仏陀ぶつだはとうに眠っている。

路みちばたに枯れた無花果いちじゆくといっしよに

基督キリストももう死んだらしい。

しかし我々は休まなければならぬ
たとい芝居しばいの背景の前にも。

（そのまた背景の裏を見れば、継ぎはぎだらけのカンヴァスばかりだ？）——

けれども僕はこの詩人のように厭世的えんせいてきではありません。河童たちの時々来てくれる限りは、——ああ、このことは忘れていました。あなたは僕の友だちだった裁判官のペップを覚えていてでしょう。あの河童は職を失った後のち、ほんとうに発狂してしまいました。なんでも今は河童の国の精神病院にいますということです。僕はS博士はかせさえ承知してくれれば、見舞いにいつてやりたいのですがね……。

（昭和二年二月十一日）

後註

- 一 「バッグ」は底本では「バック」
- 二 「知らず」は底本では「知らす」
- 三 「すると」は底本では「ずると」
- 四 この行、底本では『「ラップ君、どうしたねと言えば。」』（底本の注参照）
- 五 ルビの「きょうか」は「きょうこ」の誤か
- 六 「痲痺」は底本では「痲痺」

河童 どうか Kappa と発音してください。

底本：「河童・或る阿呆の一生」旺文社文庫、旺文社

1966（昭和 41）年 10 月 20 日初版発行

1984（昭和 59）年重版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：もりみつじゅんじ

校正：かとうかおり

1999 年 1 月 24 日公開

2004 年 2 月 26 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。